

漱石の妻 鳥越/碧 著 講談社

内容紹介

どうして私が、悪妻と呼ばれるのですか？ 文豪・夏目漱石を支えたのは一人の平凡な女性だった。が、夫の病と闘い家を守った彼女を、人は「悪妻」と呼んだ。——歴史に埋もれた「真実の夫婦の姿」が甦る！

著者略歴

鳥越/碧

1944年、福岡県北九州市生まれ。同志社女子大学英文科卒業。商社勤務ののち、90年、尾形光琳の生涯を描いた『雁金屋草紙』で第一回時代小説大賞を受賞(本データはこの書籍が刊行された当時に掲載されていたものです)

漱石の妻

鳥越碧の「漱石の妻」は、さまざまな挿話や伝説的な話があって分かり難い漱石が、生身で歩いているような趣があり面白い。作者が漱石本をよく読み込んでいるからなのだろう。鏡子夫人の「漱石の思い出」はそんなに生々しくなかったと思うが、鳥越の中で醸成された夫婦の暮らしぶりが、すさまじい形で姿を現す。

夫婦喧嘩は犬も食わないというが、夫婦の間なんて分からない。見合いの時の「歯並びが悪いのを隠さなかった」のが気に入った、ということから始まり、あれだけ女房の悪口をいい、女房に暴力を振るった漱石が、流産をした子も含め8人もの子どもを産ませているのだから分からない。あっちの方は、美醜、好き嫌いと関係がないものか。

どんな美人でもいずれは飽きてきて、切れる別れるというのが世の習いだが、これは今風であって、昭和も戦後大分経つまでは、そうではなかったのかも知れない。一度嫁いだら、二度と実家の敷居をまたがないというので、さまざまな家庭悲劇を生み、それが文学作品にもなっていた。その点、漱石の小説は、そんな辛気臭い話から解き放たれているのがさばさばしていてよく、それが、国民的人気を得た一因だろう。

要するに、漱石の書齋と鏡子夫人のいる居間が部厚い壁で仕切られていて、漱石とその弟子たちは壁の向こうで、高等遊民のおしゃべり、知的遊戯に浸っていたわけだ。鏡子は、近くに行くと聞こえてくる、自分を揶揄するような言葉をじっとこらえ、居間方向に来ては訳の分からないことをいっては暴力を振るう漱石に耐えた。そして、漱石の嫂・登世への秘めたる想いを思っ、嫉妬の火を燃やし続けていた。知的でほっそりした女が、漱石

の小説に登場する度に、登世への思慕が現れているのかどうかと思ひ悩む。

残っている写真で見ると、鏡子とて、そんなに不美人ではなかった。ただ楚々としたという感じから遠い。逆説的にいえば、それがよかったのだろう。

登世のような、まあそれに近い「虞美人草」の藤尾、「三四郎」の美禰子、「草枕」の那美さんなど、そういう女性と一緒にしていれば、すぐに別れたか、もっと凄惨な家庭になり、とても子どもを作ることなど出来なかったろう。

漱石の正義心、義侠心が強く、かつ心遣いを良くする裏で猜疑心も強く頑固という人間性に、まともに向き合うのは大変だ。まあ、週に一回集まる弟子たち程度ならいいだろうが、四六時中一緒というのは、無茶苦茶しんどい。それをなんとかやり通せたのは、また逆説的にいえば鏡子が悪妻だったからだろう。末っ子で、里子に出され家庭の温もりを知らずに育った漱石は、思いっ切り、不器用に妻に甘え、それを鏡子は受け止めた。修善寺の大患で人事不省になった時に漏らした言葉が「妻は？」だったというのは、その象徴で、この本の作者も「怒濤の底に、二人しか聴き取れない調べが流れていたのだ」とあとがきで、やや感傷的に書いている。

鏡子が書齋と居間の壁を乗り越えて出入りし、弟子たちのことをあれこれかまひ、面倒を見ていたらどうなっていたか、も想像がつく。漱石山房など成り立ち得なかったろう。何か相談しようとしても、一番古株の寺田寅彦でもそうなのだが、みんな冷たくしか応えない。そこに「鏡子悪妻説」の素地があるのだが、山房が長らええた秘密があった。

もちろん、鏡子も分かっている。「ひどい罵声を浴びせたり暴力を振るうのは、鏡子と子供達にかぎってだと思ひ当たる。友人達や寅彦や学生達、女中にはそんなことをしない」と思ひ当たり、「分別はあるのだ。……そうであれば、じっくりと話しを聞いてやれば解決するのではなかろうか」と考える。どうも最後のところが、これまた漱石の癪にさわるところで、「だからお前は分かっているのだ」と手を上げたくなるところで、筆者はそれを「かけちがひ」としてよく捉えている。

「かけちがひ」の前半は、教官時代の苦しい生活ぶりについてだ。貴族院書記官長という高官の娘として乳母日傘で育てられた身にとっては、たとえ名主の家とはいえ、全て自分でやらなければならない家庭というのは大変だろう。親兄弟と離れ、遠く松山、熊本での暮らしは想像に余りある。一方で、漱石は大学時代の仲間が世に出て名前を知られて行くのに対し、何の光明も見出せない焦燥感に囚われ、落着かない。そこで作者は「猫」に出てくる「オタンチンノパレオラガス」を出す。鏡子は漱石の仲間にその意味を聞くが、笑

ってごまかされる。「自分一人が蚊帳の外の寂しさ。初めの子の流産が重なって入水自殺未遂までする鏡子の心境描写もいい。

そうした「かけちがひ」を乗り越えて、漱石は作家になり、鏡子は威丈夫な女主人になる。

「おい、お茶だ。藤村の羊羹があったろう」「胃の方、大丈夫なんですか」「大丈夫だから言ってるんだ」。そういって金之助は書斎の戸を荒々しく閉めた。いつもこんなふうに書斎の戸が閉められる時、鏡子は取り残される思いがする。馴れっこのはずである。いまさら動揺することではあるまい。

——といった形だが、初めてともいえる二人での信州旅行もした（1911年）。漱石が「彼岸過迄」「行人」「心」「道草」そして「明暗」と書き急ぐかのように小説をものにしていくのを見つつ、その死を見取る。1916年12月である。

破れ鍋にとじ蓋という。どっちが破れ鍋かどうか分からないが、人間には二面性があるから、どっちも鍋、どっちも蓋だろう。才が勝ち、固苦しい几帳面な性格だが洒脱なところもある漱石と、ものごとに拘らず、開けっぴろげで楽天的な鏡子。互いに欠けたものを羨ましく思う気持ちは大ありだろうから、長持ちする。「別れられなかった」「理由など、そんなものはどうでもいい。別れられなかった——もしかしたら、それが自分達夫婦の真実であったのだろうか」と、作者は鏡子につぶやかせる。そう、この夫婦にとっては「すさまじさ」だけが人生だったのだ。

漱石の思い出 夏目鏡子 述 松岡 譲 記録

<http://blogs.yahoo.co.jp/yhjp711/54710209.html>

漱石の妻

夏目漱石夫妻の結婚以来の様子が、従来の漱石の弟子や門下による見かたと違って、鏡子夫人の視点から、夫人の心情の変遷を中心に語られています。

そもそも、成育歴、人生観、価値観が異なる二人は、夫婦間の関わりは勿論、夫婦を取り囲む、それぞれの実家の人々、さらに漱石を取り巻く学生、級友、同僚らとの関わり合いを通して、御互いに違和感を感じていましたが、とりわけ、新婚早々、慣れない熊本で生活することになり、漱石からは、学問があるから、相手はできないと宣言された鏡子夫人

は、周囲からの疎外感や孤独感を感じずにはいられませんでした。

さらに、思い掛けない妊娠と流産を経験し、取返しの付かない後悔や喪失感にも苛まれます。また、その後、待望の長女が生まれましたが、1年半後、漱石の不本意な目的での英国留学を契機に、二人は離れ離れの生活になりました。

この二年間余りの月日は、夫婦として御互いを見つめ合う時間にもなりましたが、漱石は、政府から与えられた課題に対する道義的責任感に悩み、潔癖性から、自らの学問の進捗に対する焦燥感、孤独感、不全感、不安感が大きくなり、帰国後にもその影響は残りました。

漱石は、結婚当時、東洋と西洋の思想や文化の狭間に身を置き、時代の要請から、一先ず、親しんだ東洋思想文化から離れて、天分と信じた英文学研究に従事していましたが、その後、英国留学を経て、日本の文明開化の姿、自ら目指した英文学研究、教師としての将来に、次第に限界を感じて、写生文学の俳句創作から、留学中の「倫敦消息」「自転車日記」などの散文、さらに小説の創作活動に新たに目覚め、遂に教職を離れ、新聞小説記者になるという激動の人生を歩みました。

一方、鏡子夫人は、漱石の道德観や学才には敬服しながらも、家族に対して不条理な言動を働く人間性には疑問を持ち続けました。しかし、この漱石の異常性を「病気」と割り切ることで耐え、妻との、あるいは、成育歴から漱石が無意識に求めていた母親としての役割を運命と受け止めて、同時に、自助努力にたいする天の救いにも希望を寄せて過ごしました。特に、何かにつけ、潔癖性が前面に立ち、模倣性を極端に嫌う漱石から苛酷な運命を強いられた子供たちを守るという使命に支えられて生きてきたことが物語られています。

さらに、その漱石の「異常性」を露知らず、教師、英文学者、作家、人格者として、漱石を手放しに崇拜し、漱石に対する鏡子夫人の言動を悪意に捉える「愛弟子たち」から浴びせられる「悪妻」という不当な評価にも屈せず、「病気」でない部分の漱石と結ばれている自信と喜びを頼りに生きて行きました。

ところで、「漱石の思い出」でも、鏡子夫人自身からは決して語られなかった、明治31年の梅雨の頃の鏡子夫人入水事件は、前年の明治30年夏の思い掛けない妊娠と流産に対する無念や、癒えない喪失感に起因する転換性障害が主たる理由として取り上げられています。この過程で、流産の後、明治30年9月、一人で東京から熊本に戻った漱石は、鏡子夫人の精神安定のために、合羽町から郊外の大江村の借家に越しました。それと共に、流産から3か月後に「小さい犬の仔」を飼ったと思われることにも注目したいと思います。

この「小さい犬の仔」は、明治 31 年早春、大江村の縁側で撮られた夏目家の集合写真で、漱石夫妻の間にしっかりと挟まれて写っています。夫妻との親密な関係が窺われます。漱石は、犬の存在（実在）が、鏡子夫人の時間に委ねるしかない喪失感や不全感を慰めると信じていたと思われます。ところが、この「小さい犬の仔」とは、明治 31 年 4 月、家主の落合東郭帰熊に伴う井川淵の第四旧居への引越の際、別れています。しかも、その三か月余り後に、鏡子夫人入水事件が起きています。

少なくとも、漱石は「小さい犬の仔」との別れも、夫人の流産のショックに追い打ちをかけて「入水事件」に発展したと考えていた節があります。というのも、漱石は、事件直後、内坪井町の第五旧居に移りましたが、犬の存在を重視したためか、鏡子夫人も同じ気持ちと考えたのか、直ぐに「大きな犬(文中では「クロ」)」を二年間飼いました。(：朝日クリエ、2012 年)

また、その後、夫妻の間に生まれた最後の子供になった五女雛子が、明治 44 年 11 月 25 日に急死しましたが、その半年後に飼い始めたのが「ヘクトー」でした。漱石は、この雑種の子犬を積極的に世話しながら、雛子の面影を求めていました。このことには、鏡子夫人は気づかなかったかもしれません。

大正 3 年 10 月、そのヘクトーが 3 歳にも満たずに亡くなると、漱石は、大正 4 年 1 月から書き始めた「硝子戸の中」で、雛子の思い出と重ねながら、しかし、『彼岸過迄』で触れた雛子の死には直接言及せず、ヘクトーの死について三章に渡って記述しました。このとき、同じ朝日新聞紙上に、高浜虚子が、子規の壮絶な最期を伝える「柿ふたつ」を発表して注目されたため、英国留学中で、友人子規の死に立ち会えなかった漱石としては非常に苦い思いをしました。

(「ヘクトー 夏目漱石と最後に暮らした犬」：日宝総合製本株式会社、2014 年)